

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：34510

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K04276

研究課題名（和文）日本人と中国人の異文化コミュニケーションに関する実験社会心理学的研究

研究課題名（英文）An experimental social psychological study on cross-cultural communication between Japanese and Chinese

研究代表者

木村 昌紀（Kimura, Masanori）

神戸女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：30467500

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本人と中国人による異文化コミュニケーションを実験社会心理学的手法を用いて検討した。まず、日本人大学生と中国人留学生による会話実験を実施した。その結果、日中比較で示された相違の傾向が確認された一方、中国人留学生による日本人への収束と日本人大学生の特徴の増加もみられた。次に、中国で暮らす日本人社会人を対象に中国人のコミュニケーション特徴の認識や、自身が中国人と関わる際のコミュニケーション特徴について調査を行った。その結果、日本人と比較した中国人のコミュニケーション特徴は実験結果と整合したが、必ずしも中国人に収束するわけではない可能性が示唆された。最後に、行動を操作した映像で実験を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義として、文化的要因を扱った従来の対人コミュニケーション理論は、欧米と東アジアを対比的に説明していた一方で、本研究は東アジア内での日本人と中国人による異文化コミュニケーションを体系的に検討するため、従来の異文化コミュニケーション理論を拡張・転回する契機になったと思われる。また、社会的意義として、日本人と中国人の間のコミュニケーション機会が非常に多い中で、日中の円滑な異文化交流のための具体的方法を提案することができたと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examined cross-cultural communication between Japanese and Chinese students using experimental social psychological methods. First, a conversation experiment was conducted between Japanese university students and Chinese students. The results confirmed the tendency of the differences shown in previous study, but also showed convergence by Chinese students toward Japanese people and an increase in the characteristics of Japanese university students. Next, a survey was conducted among Japanese adults living in China regarding their perception of the communication characteristics of Chinese people and their own communication characteristics when interacting with Chinese people. The results of this study suggest that the communication characteristics of Chinese compared to Japanese are consistent with the experimental results, may not necessarily converge with those of the Chinese. Finally, we conducted an experiment with video in which the behavior was manipulated.

研究分野：社会心理学

キーワード：対人コミュニケーション 異文化コミュニケーション 文化 日本人 中国人 異文化適応 非言語コミュニケーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、日本人と中国人の異文化コミュニケーション機会が急激に増加している。日本政府観光局(2015)によれば、2014年度台湾や香港を含めた中国から日本への入国者数は諸外国中最多で、さらに2015年度も昨年度を大きく上回る入国者数を記録している。また日本から中国(台湾・香港を含む)への訪問者数も諸外国の中で最多となっている。このように異文化交流の機会が増している日本人と中国人の間でコミュニケーションの齟齬が生じている。在中日本企業社員と現地中国人従業員(e.g., 西田, 2006, 2007)や、在日中国人留学生と日本人学生・教員(毛, 2010, 2014a, b; 岡・深田, 1995)その他日常生活(e.g., 園田, 2001)など様々な場面で、両者のコミュニケーション・トラブルが調査研究から報告されている。しかし、日本人と中国人の間でトラブルが生じる要因は特定されておらず、解決策も示されていない。

従来の研究は、欧米と東アジアを対比する構図で知見を蓄積し、異文化コミュニケーション理論を構築・展開していた(Hall, 1976; Markus & Kitayama, 1991; Ting-Toomey, 2005; Triandis, 1995)。具体的には、重視するのが個人か集団か、コミュニケーションが直接的か間接的かといった観点から、異文化コミュニケーションが説明されてきた。それらの理論は、日本と中国を同じ東アジア文化圏として扱うため、両者のコミュニケーション・トラブルを説明することが難しい。実際に、日本人と中国人の対人コミュニケーションには共通点だけでなく相違点も多くある(e.g., Kimura & Mao, 2015a, 2015b)。加えて、両者の共通点と相違点の他に、日本人と中国人の異文化コミュニケーションを説明するためには、日中異文化コミュニケーション特有の問題を踏まえて、従来の理論を拡張する必要がある。

研究者はこれまで、日本人同士と中国人同士それぞれの会話実験を実施して日本人と中国人の対人コミュニケーションに関する比較研究を体系的かつ継続的に行ってきた。まず、協調的なコミュニケーションで、2種類の話題条件(親密なおしゃべり・社会的なテーマの話し合い)を設け、対人関係の段階(未知・友人)を操作して、動機・行動・認知的側面から、日本人と中国人の対人コミュニケーションを実験的に比較した。その主な結果として、共通点 日本人・中国人は、どちらも親しみやすさ、社会的望ましさ、有能さ、外見的魅力の順に自己呈示動機が高いこと、共通点 コミュニケーションをポジティブに認知する程度は日本人と中国人で違いがないこと、相違点 中国人より日本人は親しみやすさや外見的魅力の自己呈示動機が高いこと、相違点 日本人は笑顔やうなずきが多く、中国人は視線量が多く対人距離が小さいこと、などが示されている。次に、非協調的なコミュニケーションでも、2種類の話題条件(役割演技法による対人葛藤・競争的な討論)を設け、対人関係の段階(未知・友人)を操作して、動機・感情・行動・認知的側面から、日本人と中国人の比較を実施している。

このように、研究者はこれまでの研究で、日本人と中国人それぞれの対人コミュニケーション特徴の共通点と相違点を体系的に明らかにしている。協調的か非協調的か、話題が情緒志向的か課題志向的か、関係性が未知か友人か、という多角的な観点から、自己呈示動機、言語・非言語行動、コミュニケーション認知の各側面について日本人と中国人で何が共通し、どう異なるかを示してきた。更に、これまでの日本・中国間比較の成果から、もし日本人と中国人が異文化コミュニケーションを行えば、仮説「日本人はイメージ戦略として笑顔やうなずきを行う一方、中国人はストレートな表出を行う傾向があるため、日本人の笑顔やうなずきを見た中国人は素直な好意や同意の表出として誤解するだろう」仮説「日本人にとって快適な対人距離が中国人に疎外感を生じさせる一方、中国人にとって快適な対人距離が日本人に圧迫感を生じさせるだろう」という予測が導出された。

2. 研究の目的

本研究は、対人コミュニケーションに関する日本・中国間比較研究の枠組に基づき、新たに日本人と中国人の異文化コミュニケーション実験を体系的に実施し、その研究成果をこれまでの研究成果と比較・考察して、日本人と中国人による円滑な異文化コミュニケーション方法を提案する。具体的な実験状況として、「話題の種類」(情緒的・課題解決的)を操作する。また、日本で日本人と在日中国人を対象に(実験1)、中国で中国人と在中日本人を対象にした実験(実験2)を実施する。前者は日本語、後者は中国語を使用する。実験前に、あらかじめ日中相互に対する顕在・潜在的態度を測定し、日中異文化コミュニケーションの動機・行動・認知的側面に及ぼす影響を包括的に調べる。すべての研究結果を総合し、日本人と中国人の円滑な異文化コミュニケーション方法を提案するとともに、東アジア内の日中異文化コミュニケーションを説明できるような、新たな理論を考案することを目指す。

3. 研究の方法

実験1の研究方法は以下の通りであった。日本国内で、大学生の実験参加者を初対面になるように日本人と中国人留学生を別々に募集して2人1組で実験した。顕在・潜在的態度の測定では、相互の国・国民に対する顕在・潜在的態度を会話前に測定した。後者の測定はBanaji & Greenwald(2013)に準じ Implicit Association Test (IAT)を用いた。会話実験手続きは、「情緒的課題」(キャンパス・ライフについて自由に会話する)と「課題解決的課題」(社会問題を話し合い、結論をまとめる)の両条件に日本語で取り組んでもらい、会話の様子はデジタルビデオカメラで撮影した。それぞれの会話終了後に質問項目に回答してもらった。質問項目は、対人コミュニケーションの動機的側面は「自己呈示動機」尺度(谷口・大坊, 2005)で測定した。この尺度は、外見的魅力・親しみやすさ・有能さ・社会的望ましさの下位尺度から構成される。認知的側面の測定は「対人コミュニケーション認知」尺度(木村・大坊・余語, 2010)を使った。行動の分析では、撮影した音声映像から「笑顔」「発話」「うなずき」「視線」の生起時間と頻度をコーダー2名が算出した。定義と手順は木村・磯・大坊(2012)に準じる。また、対人距離はストップ・ディスタンス法で測定する。さらに、音声映像から発話内容を文字起こしし、定量化した。

実験2は当初、実験1と同様の手続きで、中国国内にて中国大学生と日本人留学生を対象に募集して実験を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、海外渡航の禁止、対面形式の会話実験ができなくなった。数年間を経て感染収束の流れの中で、海外渡航は再開されたものの、日本人留学生がほとんどいないことや、中国の大学内で対面形式の会話実験を行う難しさがあった。そこで、別のアプローチで研究を進めることにした。

中国に滞在する日本人社会人を対象にオンライン調査を実施した。日本人と比較した際の中国人の対人コミュニケーション特徴や、自身が中国人とコミュニケーションする際の特徴に回答を求めた。日本人と比べた際の中国人の対人コミュニケーション特徴は、これまでの実験結果と大部分は整合していた。その一方で、在中国日本人は、その中国人の対人コミュニケーション特徴に必ずしも近づけるわけではないようであった。また、これまでの実験や調査結果を踏まえ、映像上でコミュニケーション行動を操作した印象形成実験を行った。

4. 研究成果

日本人大学生と中国人留学生による異文化コミュニケーション会話実験の結果は以下の通りであった。まず、日本人が中国人より笑顔やうなずきが多かった。これは日本人・中国人同士の比較結果(木村・毛, 2012)と一致していた。中国人留学生は日本人同士と同程度の笑顔・うなずきであった。また中国人留学生の視線は中国人同士より抑制されていた。これは、文化適応(e.g., Palomares, Giles, Soliz & Gallois, 2016)していると考えられる。留学生とのおしゃべりで、日本人大学生の笑顔やうなずきは日本人同士の時より増加していた。このことは、自己呈示動機の増加・ポジティブな認知とも整合している。交流機会の少ない相手ゆえ、高く動機づけられた可能性がある。中国人に対する感情温度が高いほど、日本人は視線量が増加し、おしゃべりをポジティブに認知していた。日本人への感情温度が高いほど中国人は視線・うなずきが増加し、社会的距離が近いほど、中国人は発話・笑顔・うなずきが増加していた。

中国に滞在する日本人社会人を対象に行ったオンライン調査の結果は以下の通りであった。中国在留邦人は、中国人のうなずきは少なく、発言量は多く、対人距離が近いと感じていた。その上で、在留邦人はその行動に合わせるわけではなく、中国人相手の際のうなずきや対人距離は日本人相手との際と変わらず、中国人相手よりも日本人相手の方がたくさん話していた。他にも感謝の頻度やSNSの返信速度の違いを検討した。さらに、模擬的に中国人役の人物がコミュニケーション行動を日本人の特徴と中国人の特徴に近いように演じた際に、印象がどのように変わるかも実験的に検討した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 毛 新華、木村 昌紀	4. 巻 5
2. 論文標題 中国人留学生を対象とした日本文化的社会的スキル・トレーニングの効果性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸学院大学心理学研究 = Kobe Gakuin University Journal of Psychology	6. 最初と最後の頁 39 ~ 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32129/00000287	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 毛 新華・清水 寛之・木村 昌紀	4. 巻 4
2. 論文標題 中国の在留邦人における文化適応課題の検討 日中文化の相違点の認識に関する調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸学院大学 心理学研究	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32129/00000229	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村昌紀・山本恭子	4. 巻 24
2. 論文標題 メール・コミュニケーションにおける顔文字や表情絵文字の交換過程が対人感情に及ぼす影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 感情心理学研究	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4092/jsre.24.2_51	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 木村昌紀・毛 新華・小林知博
2. 発表標題 日本人と中国人はどのように討議的コミュニケーションを行うのか? - 日本人大学生と中国人留学生による討議の実験的検討 -
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村昌紀・毛 新華・小林知博
2. 発表標題 日本人と中国人はおしゃべりでいかに関わるのか？ - 日本人学生と中国人留学生による情緒志向的会話の実験的検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masanori Kimura, Xinhua Mao, Jinsheng Hu & Chihiro Kobayashi
2. 発表標題 Experimental study of confrontational discussions in collectivistic cultures: Comparison between Japanese and Chinese people.
3. 学会等名 The 13th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Taipei, Taiwan. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛 新華・木村昌紀
2. 発表標題 在中国日本人留学生の中国文化適応に関する社会的スキル・トレーニングの試み
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村昌紀・毛 新華・胡 金生・小林知博
2. 発表標題 集団主義文化における対立的討議の実験研究 - 対人葛藤と言語・非言語的行動による対処方略に関する日本人と中国人の比較
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛 新華・木村昌紀
2. 発表標題 中国文化を反映した社会的スキル・トレーニングは日本人大学生の行動を変えるのか？ 中国人観察者によるトレーニング効果の客観的検証
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masanori Kimura, Xinhua Mao & Jinsheng Hu
2. 発表標題 Experimental study of interpersonal conflicts and management strategies in collectivistic cultures: Comparison between Japanese and Chinese people
3. 学会等名 2018 annual convention of the Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 毛 新華・木村昌紀
2. 発表標題 中国文化要素の社会的スキル・トレーニングが日本人大学生の行動にもたらす変化 日本人観察者による評価の結果から
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木村昌紀・毛 新華
2. 発表標題 日本人と中国人は葛藤状況のコミュニケーションで何が違うのか？－行動的役割演技法を用いた実験的アプローチ
3. 学会等名 日本社会心理学会第57回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 木村昌紀
2. 発表標題 協調・非協調状況の対人コミュニケーションに関する日本・中国間比較
3. 学会等名 第28回広島社会心理学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木村昌紀
2. 発表標題 日本語訳「対人コミュニケーションの中国・日本間比較 中国人と日本人の円滑な交流を目指して」
3. 学会等名 日本語訳「児童・青少年の社会性の発達と健全なパーソナリティ育成国際フォーラム」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岡本真一郎・木村昌紀・山下玲子・菅さやか・今井芳昭・相馬敏彦・太幡直也・竹中一平・花尾由香里・中尾元・内田由紀子・北村智	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 コミュニケーションの社会心理学	

1. 著者名 谷口淳一・相馬敏彦・金政祐司・西村太志・木村昌紀 他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 191
3. 書名 エピソードでわかる社会心理学 - 恋愛関係・友人関係から学ぶ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

対人関係心理学研究室
<http://m-kimura.net/>
 遼寧師範大学
<http://news.lnnu.edu.cn/showoa.php?id=25463>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	毛 新華 (Mao Xinhua) (90506958)	神戸学院大学・心理学部・准教授 (34509)	
研究分担者	小林 知博 (Kobayashi Chihiro) (70413060)	神戸学院大学・人間科学部・教授 (34510)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関